


ともにくらすわたしたち ～世界を知り 未来をつくる～

【実践者】

氏名	佐川 明日香	
学校名	つくば市立春日学園義務教育学校	
対象学年	6年生(110名)	
担当教科等	外国語科・つくばスタイル科・図画工作科	
実践年月日もしくは期間(時数)	2025年11月～12月(8時間)	

【実践概要】

1. 実践する教科・領域

- ・つくばスタイル科 国際理解
- ・道徳科 C 主として集団や社会との関わりに関すること

2. 単元名と単元目標

① 単元名

ともにくらすわたしたち ～世界を知り 未来をつくる～

② 単元目標

外国の文化や暮らしに目を向け、進んで他国の人々と関わろうとする態度を養うとともに、世界で起きている様々な問題について理解を深め、その改善・解決に向けて自分事として捉え、主体的に考える力を育成する。

③ 関連する学習指導要領上の目標

探求的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、より良く課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次の通り育成することを目指す。(総合的な学習の時間)

3. 単元の評価基準

① 知識及び技能

外国の文化や暮らし、世界で起きている様々な問題について理解し、学習した内容を基に説明している。

② 思考力、判断力、表現力等

世界で起きている問題を自分事として捉え、その改善・解決に向けて自分たちにできることを考え、理由や根拠をもって表現している。

③ 学びに向かう力、人間性等

外国の文化や暮らしに関心をもち、進んで他国の人々と関わろうとするとともに、異なる文化を尊

重しながら学習に取り組んでいる。

4. 単元設定の理由・単元の意義

① 単元設定の理由

現代は、グローバル化が進展し、世界の人々と関わり合いながら生きていくことが求められている。こうした社会においては、異なる文化や価値観を理解し、互いに尊重し合う態度を育てることが重要である。

小学校段階においても、外国の文化や人々の暮らしに関心を持ち、多様性を認め合う心を育むことが求められている。特に高学年では、これまでの学びを生かして、自ら課題を見つけ、調べ、考え、まとめていく探究的な活動を通して、国際理解の素地を育てていくことが大切である。

そこで本単元では、外国の文化や諸問題に目を向け、進んで他国の人々とつながり、国際親善に努めようとする態度の育成を目指す。

② 単元の意義

本単元を通して、児童は世界の多様な文化や課題に触れる中で、他者との違いを受け入れ、互いに理解し合うことの大切さに気づくことができる。また、自分にできる国際協力の在り方や、グローバル社会の一員としての責任について考えることで、広い視野と主体的に行動しようとする態度が養われる。将来、国際的な場面で他者と協働していく力を育てるためにも、本単元は意義ある学習である。

③ 児童観

本校の児童は、全体として外国への関心が比較的高く、約 73%(80 名)が「外国に興味がある」と回答している。その理由としては、「異文化への興味」を挙げた児童が 41 名と最も多かった。一方で、「外国に興味がない」とした児童の理由には、「言葉が通じない・分からないから」といった不安を抱く声が 19 名いる反面、「日本が好きだから」という肯定的な理由を挙げた児童も 13 名見られた。

また、「自分にとって身近な国・地域」についてたずねたところ、アフリカと回答した児童は全体のわずか 3%と六大陸の中で最も低く、日常生活の中でアフリカを意識する機会が少ないことがうかがえる。

国際協力に関する意識については、「よくわかる・だいたいわかる」と答えた児童が 31%と十分とはいえない状況である。しかし、世界の課題を解決するために「国同士が協力し合うことが必要である」と考える児童は 104 名(95%)と非常に多く、国際社会の一員として協力する姿勢を肯定的に捉える意識は高いといえる。

④ 指導観

本単元では国際協力を主題として扱うが、その学びを深めるためには、児童が世界の課題を自分事として捉えられるようにすることが重要である。そこで、対象国をウガンダに絞り、単元の導入では異文化理解の視点から、ウガンダの文化や生活に触れる学習機会を設定する。また、ウガンダの人々と直接交流する場を設けることで、児童が実際の生活や価値観に触れながら理解を深め、国際協力について主体的に考えられるようにしていく。

また、単元の終末では「世界の問題を解決するために自分にできること」を考える学習を位置付けている。しかし、漠然とした課題では児童が具体的な行動を思い描きにくく、募金など表面的な意見にとどまりがちである。そこで、まず児童自身が「30 年後の理想の未来」を描く活動を行い、その理想を実現するために自分はどのように関わり、どのような行動を積み重ねていくのかを考えさせる。これにより、児童がより主体的かつ具体的に行動を捉えることができ、国際協力を自分事として捉える力を育てたい。

5. プログラム計画

回	テーマ ねらい	方法・内容	使用教材等
0	ウガンダの子どもたちが喜ぶうちわをデザインしよう ねらい:国際交流への関心や意欲をもつ。	・3~4人ずつのグループに分かれて、白紙のうちわ片面に絵や文字を組み合わせて自由にデザインする。 ・できたうちわと写真をとる	
1	どうしたら世界中の人々が幸せに暮らすことができるだろう ねらい:世界の諸問題について知ることによって単元全体の問題意識をもつ。	・教科書の写真を見て、世界の諸問題について考える。	・道徳科教科書(東京書籍)
2	多文化の世界を体験しよう ねらい:多文化社会の一面をアクティビティを通して体感し、文化の多様性を実感する。	・「世界がもし100人の村だったら」のアクティビティを通して、多文化社会について理解し考える。	・「世界がもし100人の村だったら」
3	ウガンダってどんな国? ねらい:ウガンダの文化や人々の生活について知り、外国の文化に対して肯定的な関心をもつ。	・写真を見たり先生の話の聞いたりして、ウガンダの文化や暮らしについて知る。 ・体験的に理解する。(ポリタンク運び・アフリカンダンスと楽器演奏・衣装体験・O×クイズなど)	・パワーポイント ・ワークシート ・ポリタンク ・楽器 ・衣装
4	ウガンダの子どもたちとつながろう ねらい:交流を通してウガンダを身近に感じ、国際的な諸問題を自分ごととして捉える。	・あしながウガンダの子どもたちとオンライン交流をする。(文化紹介やインタビューなど)	・Zoom
5	ウガンダが抱える問題について知ろう ねらい:ウガンダの社会的・経済的な課題について、背景を踏まえて理解を深める。	・ウガンダの抱える問題(貧困・水や衛生・難民)について、フォトランゲージやインターネットなどを通して知る。	・写真 ・新聞記事 ・Youtube
6	国際協力ってどんなこと? ~ JICAの人たちの思いから~ ねらい:JICA隊員の活動や思いに触れ、国際協力の具体的例や隊員の思いについて知る。	・海外で協力隊として活躍されている方々の事業内容ややりがいなどについて、話を聞く。	・ワークシート
7	ともにくらすわたしたち~私の第一歩を考えよう~ ねらい:学んだことをふり返し、世界の人々と共に生きるために自分にできることを考え、行動につなげようとする態度を育てる。	・30年後の具体的な理想の世界の姿についてウェビングマップを用いて考えを広げる。 ・「持続可能な未来を実現する9つの方法」をダイヤモンドランキングに並べ、それをもとに「私の第一歩」について考える。	・シンキングツール(ウェビングマップ・ダイヤモンドランキング)
☆	国際協力について考えよう(カンボジア編) ねらい:筑波大学公認サークルWorldFut TSUKUBAの行っている国際支援について知る。カンボジアの文化を体験する。	・筑波大学公認学生団体WorldFut TSUKUBAさんによる特別授業。カンボジアの文化を体験したり国際支援について知ったりする。	

6. 本時の展開

時間	第4時		
本時のねらい	交流を通してウガンダを身近に感じ、国際的な諸問題を自分ごととして捉える。		
過程 (時間)	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> ・本校とあしながウガンダから短い挨拶を行う。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">ウガンダの子どもたちとつながろう</div>	<ul style="list-style-type: none"> ・交流の目的や流れを伝えて、見通しをもたせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・zoom ・板書
展開① (20分)	<ul style="list-style-type: none"> ・日本とウガンダの各国から、それぞれ10分ずつ文化の紹介を行う。 (日本…よさこいソーランの披露。 ウガンダ…チガンダダンスの披露。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・なるべく児童が主体となって発表を行えるようにする。 ・ウガンダ側の発表で難しい言葉などがある場合は適宜説明する。 	
展開② (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ブレイクアウトルームに分かれ、7～8人の少人数でウガンダの子どもたちと交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外国語の授業で考えた質問メモを見たり、学習者用端末で翻訳機能を使ったりしながら交流できるように声をかける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・質問メモ【資料1】 ・学習者用端末
まとめ (5分)	<ul style="list-style-type: none"> ・本日の交流を振り返り、感想や感謝の言葉を述べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童が英語での発表ができない場合は、ALTに翻訳してもらう。 	

7. 評価規準に基づく本時の評価方法

- ・活動の様子
- ・ワークシートやふりかえりシートの記述

8. 学校外との連携

- ・あしながウガンダとのオンライン交流を実施し、両国のダンス紹介や質疑応答を通じた交流活動を行った。交流前は、アフリカに対してなじみの薄い児童が多く見られたが、実際に現地の人々と直接やり取りをすることで、ウガンダを身近に感じることができるようになった。その結果、交流後の学習では、ウガンダで起きている課題についても自分事として捉え、次時以降の学習においてより深く考える姿が見られた。
- ・ゲストティーチャーとして筑波大学公認サークル *WorldFut TSUKUBA* の学生に来校いただき、カンボジアにおける国際協力の取組について話を伺った。大学生という児童にとって身近な存在から話を聞くことで、国際協力を特別なものとして捉えるのではなく、「自分たちにもできることは何か」と主語を自分に置き換えて考えることが容易になった。
- ・今後、JICA 海外協力隊員をゲストティーチャーとして招き、実体験に基づいた国際協力の話を伺う予定である。実際に海外で活動した経験を聞くことで、児童が国際協力を現実的かつ具体的なものとして捉え、学びを一層深められるようにする。

9. 生徒の学びの軌跡

【世界中の人々が幸せに暮らすために、自分に何ができるかな？】

○単元実施前のアンケートより

- ・世界が協力すること。国が支援すればいいと思う。

- ・貧困をなくすこと。募金。
- ・SDGsなどの目標を徹底的につぶしていき、世界に協力すること。
- ・世界中で戦争をなくして、みんなが安心して暮らせること。
- ・差別をしないこと。

○ 第8時ワークシートより

- ・気になったことを調べて、自学ノートにまとめたり親や友達に教えたりする。
- ・自分の生活で差別することをなくしてそれを友達などに広める。平等について考える。
- ・ニュースをよく見て、どの国が困っているのか、どの国がどのくらい生活が厳しく、政治はどう動くのかなどについて知る。
- ・ダイヤモンドランキングをする前は、寄付をするくらいしか思いつかなかった。ダイヤモンドランキングの内容を見て一番「行動する」について、しっくりきた。確かに行動しないと何も始まらないから、水などを出しっぱなしにしないようにしたい。
- ・現実を知ることが大切だと思います。まず今の世界の状態を知らないとどれだけの人が苦しんでいるか分からないからです。知ったら、寄付など少しでも協力するのがいいと思います。
- ・まずは行動することが大切。世界に〇〇しましょうなど、友達や他の人と協力してポスターや言いたいことを発信して伝える。自分から行動することによって、みんなが共感をもってくれる。→世界が変化するかも。→SDGs、環境問題など、理想にしていたものが実現するかも。
- ・たくさんの人と話し合っただけで考えを広げる。具体的にはたくさんの人(子ども・大人)たちと話し合っただけでいろいろな意見を聞いて、その意見のいいところを使って困っている人たちを助けるためのアイデアにする。

10. 自己評価

① 成果が出た点

- ・単元実施前は、「世界のためにできること」を募金に限定して捉える児童や、「協力すること」といった抽象的で具体性に欠ける意見を挙げる児童が多く見られた。しかし、単元を通して学習を進める中で、「現状を知ること・広めること」や「自分自身の行動を見直し、変えていくこと」なども、自分たちにできる具体的な行動として捉えられるようになった。
- ・オンライン交流を通して、児童はウガンダという地理的に遠い国を身近な存在として感じる事ができた。振り返りには、「意外とフレンドリーだった」「意外と元気だった」など、交流前に抱いていたイメージとの違いに気付いた記述が多く見られ、いずれも肯定的な内容であった。
- ・ウガンダの文化や言語に対する親しみが深まった。休み時間などの日常場面において、児童同士でルガンダ語を使ってみたり、展示してある教材や文化物に自発的に触れたりする姿が見られ、学習が授業時間外にも広がっていることがうかがえた。

② 苦勞した点

- ・研修で得た知識や授業手法が多岐にわたっており、それらの中から本単元のねらいに即したものを選択し、どのように授業に反映させるかを取捨選択する点に難しさがあった。
- ・教材作成においては、児童の興味・関心を引き出す内容であると同時に、知ってほしいことや考えを深めてほしい視点を盛り込む必要があり、そのバランスを取ることに苦勞した。

③ 改善点

- ・第2～第4時の授業では、学年全体を対象として実施したが、大人数を一人で指導する体制であったため、個々の児童への関わりが十分に行き届かず、学びを一層深める点に課題が残った。今後は、複数教員による指導体制を整えるとともに、学級単位での授業実践も検討し、少人数でのグループ活動や役割分担を取り入れることで、児童一人一人の思考や対話を丁寧に支援し、学びの深化を図っていききたい。

